

「すくも」づくり順調に

佐野高付中 藍染めプロジェクト

佐野市天神町の佐野高付中(青柳育夫校長、生徒315人)で5日、藍染めに使う「すくも」づくりに1年生が取り組んだ。原料も自分たちが育てた藍草で、来年1月には完成したすくもで「藍建て」し、藍染めを体験する予定だ。

今年度の総合的な学習の時間「藍染めプロジェクト」の一環で、3クラスの計105人が参加。県伝統工芸品「足利の藍染」を手掛ける風間幸造さん(56)が講師を務め、6月にスタートした。新型コロナウイルス感染症に



湿らせた藍草の葉をもみ込む
生徒たち＝佐野市天神町で

伴う臨時休校明けの初回は、ウェブ会議システムを利用したオンラインで指導を受け、生徒たちは藍草(タデアイ)の苗を1株ずつプ

ランターで育てた。

この日のテーマの「すくも」は藍染め液の原料で、乾燥させた藍草を微生物の力を借りて発酵させて作る。このすくもに灰汁や小麦の皮などを加えて再度発酵させる工程を藍建てと呼び、天然藍の染め液が出来上がる。

生徒たちは、すくもづくりを中心に藍染めの過程について風間さんの講義を受けた後で実技に臨み、夏に収穫して乾燥させた藍草の葉を衣装ケースに入れて水を加え、しっかりとするまでもみ込んだ。湿らせた藍草は、稲わらで編んだ「かます」に入れて保温。毎日空気をさらす「切り返し」を繰り返すと発酵し、10〜20日後には完成するという。

リーダーの前田歩美さん(13)は「乾燥していた葉が柔らかくなるのを実感できた。すくもがうまくでき、藍染めを成功させるのが楽しみ」と話していた。

【太田穂】